巻頭言

青山学院院長　梅津　順一

青山学院女子短期大学『紀要第70輯』の発行，まことにおめでとうございます。一年，一年の青山学院女子短期大学に属する先生方の研究の「70輯」にいたる積み重ねが，このように記念すべき時を迎えました。『紀要』に寄稿された大勢の先生のご研鑽に敬意を表したく存じます。

研究者の発表の機会としては，それぞれの学会が刊行する学会誌があり，その場合多くはレフリー制度を導入しています。査読とも呼ばれますが，匿名の審査者，レフリーが寄稿された論文を査読し，評価を下すわけです。論文の評価には，査読付きかどうかが問われる機会も多く，大学ないし学部が刊行する研究誌でも，レフリー制度を導入することが多くなりました。しかし，その制度も良いようであり，窮屈でもあります。テーマ設定や方法には，どうしても流行が付きまとい，評価されやすい傾向があります。その意味では，この『紀要』のような存在は，研究者がより自由に，より率直に，自分の主題を展開できる良さがあります。

個人的なことになりますが，私は1988年から十年ほど本学の教員でしたので，この『紀要』に寄稿する機会がありました。教養学科に所属した当時の私の担当科目は「社会思想史」で，教養学科向けと一般向けの二種類の講義を担当するために，それまで研究したイギリス社会思想とは別に日本の近代思想史の講義を行うことにしました。後者は，勉強しながら講義するかたちで，その講義ノートの一部を『紀要』に寄稿しました。専門にうるさい学会誌では難しかったことですが，この『紀要』に助けられて研究を進め，講義を行い，最終的には一冊の研究論文集をまとめることができた次第です。本学の『紀要』は，その意味で私個人にとって重要なものでした。

駆け出しの研究者だったころ，ある碩学が若い研究者に，研究論文を絶えず書き続けるように，たとえば，二年に一度はそれなりの論文を書き，十年たてば，それらをまとめて研究書を刊行するようにと，勧めておられたことを思い出します。また，かつては教師の研究論文を学生が読みかつ討論の材料とすることもありました。教育と研究とが一緒になって前進している実感がありました。近年はどの大学でも，そのような気運は稀になってしまいました。しかしなお各大学，各学部の研究誌は，その大

学，学部の顔といえるでしょう。その顔を作り上げるのは，長年の研究の積み重ねに他なりません。創刊から六十四年の歴史を誇るこの『紀要』も，それぞれの時代を示す顔として，何かを語り続けるのではないでしょうか。

「巻頭言」としては，いささか個人的な感想を記すことになりました。一つの研究論文には著者の研究の少なからぬ時間があり，参照される参考文献の研究時間を加えれば，さまざまな研究者のながい研究の蓄積が背景にあります。そのことへの敬意と畏敬が長く生き続け，継承されていくことを願いたいと存じます。青山学院女子短期大学『紀要第70輯』の達成を心からお祝いいたします。